

終戦から65年。

戦争を体験した人は少なくなり、戦争を知らない世代が多くなりました。

「戦争は過去のこと」

そう感じてしまうのは仕方がないことなのでしょうか。

皆さんは知っていますか。

平和を感じることにすら薄れてしまっている

私たちが知らない、

終戦を迎えることのできない思いがあることを。

「ただいま」

「お帰り」

いつまでもいつまでも

その言葉を待つ

ある仲間たちの願いを。

「お帰り」 「そう言える日まで」

平和の陰に残る戦争のつめ跡

回ゼンタワー前富士見大通りに設置してある「核兵器廃絶平和宣言塔」。核兵器の廃絶を訴え、平和を願っている。



戦争 シベリア抑留

昭和16年、太平洋戦争の突入とともに戦線は拡大し、アジア・太平洋地域一帯が戦場となりました。戦争が長期化すると、連合軍の圧倒的な物量との差などから、前線部隊は退却。続いて本土空襲が始まり、艦砲射撃や原子爆弾の投下によって多くのとうとい命が失われました。

昭和20年8月14日、ポツダム宣言受諾。戦場にいた日本人は祖国に帰れる喜びを胸にしていました。しかし、終戦は悲劇の終わりではありませんでした。多くの日本人がソ連軍によって連行され、シベリアやモンゴルの地に抑留されました。酷寒、飢餓、重労働、約5万5000人の日本人が望郷の念に身を焦がしつつ、異国の土となったのです。



静岡県抑留犠牲者慰霊碑（中島）
毎年11月第1日曜日に慰霊祭を実施しています

日本に戻るべき兵士が散った地「シベリア」

日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ
平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ（ポツダム宣言第9条）

満州に渡って1年5か月。終戦を告げる玉音放送を一人、部隊で聞いた中根等さんのその後の話

帰国を信じて

8月17日、各部隊から召集された私たちは、自動小銃を持ったソ連兵に「銃はこっち」「弾はこっち」と言われるまま、武器という武器をすべて取り上げられました。これが武装解除です。「トウキョウダモイ（東京に帰してやる）」その言葉に私たちは、故郷に帰れると信じ、ソ連兵が言うとおり貨物列車に乗車しました。

「このときはまだ、これから極寒の地シベリアに4年間も抑留されるとは夢にも思っていませんでした」

目的地を告げず15日間北進を続けた列車は、ソ連チタ州西方約300キロメートルで停車しました。下車すると、戦場で肌身離さず持っていた大切な品々を突然ソ連兵に奪われました。私たちから奪った腕時計をいくつも腕に巻いたソ連兵の得意げな姿は、今も忘れることができません。丸腰の私たちは、自動小銃を持つソ連兵に追わ

眠っているのです」



シベリア抑留を経験、1949年に帰国した
中根 等さん（伝法）

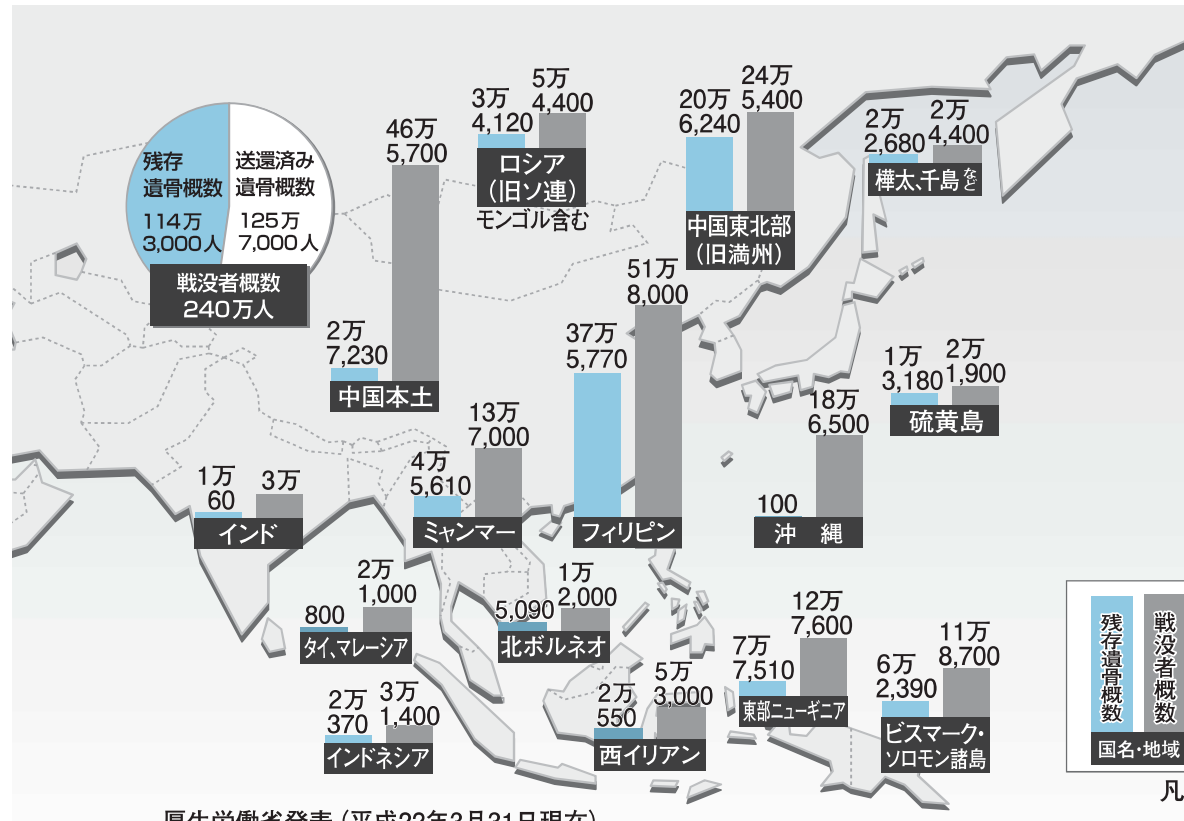
れながら収容所に連行されたのです。収容所と言っても、そこには何もありませんでした。私たちの抑留生活は自分の宿舎を丸太でつくるところから始まったのです。その後は、毎日木材の伐採作業。この間に栄養失調による死者が続出しました。特に、翌年にかけては厳しい寒さによって、各収容所で8割の人が亡くなったと聞きます。作業はいわゆるノルマ制でした。ノルマを達成できない場合はその分食事を減らされました。食事は黒パンやジャガイモばかりで、栄養不足は否めません。しかし、私たちは伐

採現場の木になっていた「松の実」を食べることができたおかげで、比較的元気に作業をこなすことができました。松の実には脂肪分が多いため、ポケットに入れてある限り、雪中の厳しい伐採にも耐えられるエネルギーを補給することができました。

「トウキョウダモイ」何度となく言われ、収容所を7か所めぐりました。次は本家に帰してもらえるのか、また裏切られるのか……。私が帰国できたのは、1949年10月25日、終戦から4年たっていました。

戦争 遺骨収集

遺骨が残る主な地域



厚生労働省発表 (平成22年3月31日現在)

第二次世界大戦中・戦後、海外で死亡した日本人は約240万人(概数)と言われています。その遺骨を故郷・日本に帰す活動が遺骨収集活動です。

厚生労働省は、昭和27年度から南方地域での遺骨収集を開始。また、平成3年度からは旧ソ連地域、平成6年度からはモンゴルでそれぞれ、抑留中の死亡者について遺骨収集が可能になり、活動を開始しました。

その結果、これまでに約32万柱の遺骨を収集。陸海軍部隊や一般邦人の引き揚げ者が持ち帰ったものを含めると、海外戦没者約240万人のうちの約半数(約126万)が送還されています。

旧ソ連・モンゴル地域には、第二次世界大戦後に約57万5000人(推計)が抑留され、約5万5000人が抑留中に死亡しています。平成21年度末までに2万2800柱の遺骨を収集し、モンゴル地域についてはおおむね収集を終えています。

おれだけ帰って済まない 必ず迎えに来るから

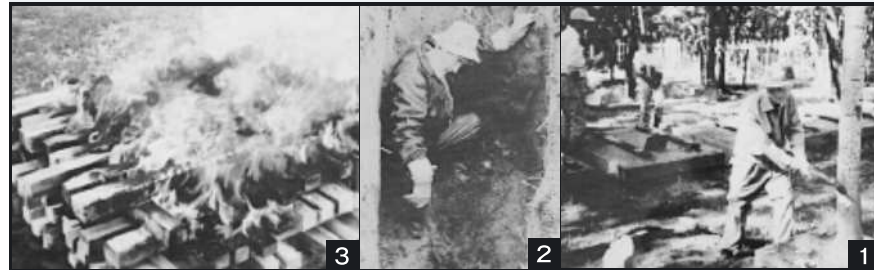
生前、遺骨収集活動に熱心に参加していた望月寅雄さん。それは、自身がシベリアで抑留されていたとき、抑留中に死亡した同僚とのちかい言葉「必ず迎えに来る」この約束を果たすため。これは、故望月寅雄さんの記録

大正15年8月10日 大淵にて出生
 昭和16年 6月 満州に渡る。「満蒙開拓青少年義勇軍」入隊
 昭和20年 8月7日 徴兵。部隊入隊
 8月16日 武装解除。強制労働
 昭和24年 帰国
 平成3年 〳 シベリア遺骨収集・埋葬地調査に参加(計19回)
 平成20年10月19日 死去(享年83歳)

食う物もない、労働はきつい、氷点下30℃・40℃の寒いところでも仕事をしなきゃならない。

奥さんの名前を呼び、息子の名前を呼びみんな倒れていった。私はこうして帰って来たが、いまだに帰れない同僚がソ連の凍土の中に埋められている。私はソ連から生きて帰って来た者の使命として、遺骨調査・遺骨収集に参加している。

みんな祖国のために連れて行かれたのだから：



1「早く見つけるよ」約束が今果たされる 2「やっと迎えに来れたよ。日本に帰ろう」かたい大地で待ち続けた57年前の若い将兵に語りかける 3「風がどの方向に吹いていても、煙は必ず日本にたどり着く」そう信じて焼骨する
 [1,3:H6.7.26~8.9 2:H15.10.6~20 遠藤尚次さん撮影]

「ここに存在している私たちを、戦争の真実を知ってくれ」そう語りかけているようでした。



望月寅雄さんの遺志を継ぎ、遺骨収集活動に参加。現地を調査し、戦者体験者の口述記録をとり続ける辻 俊行さん（伝法）

私が初めて遺骨収集に参加した2006年8月の活動は、夏にもかかわらず氷点下、雪の中での作業でした。厳冬期には氷点下60℃にもなる収容所で、極寒・飢餓・重労働の末に無念にも亡くなった兵士の亡きがらは、戦争の悲惨さ、愚かさを私に訴えていました。

政府が派遣している遺骨収集は、抑留経験者本人または遺族のみが参加できます。そのどちらにも当てはまらない私が参加できるのは、仲間との約束を果たすため、遺骨収集を続けた望月寅雄さんのおかげです。

日本を思い、日の丸を背負って戦った望月さん。「ふるさとに帰りたい」そう思いながらシベリアの凍土に眠った仲間たちと

の最期の約束は「絶対ふるさとに帰してやる」。その約束を果たすため、「お帰り」そう言える日まで、かたくなに仲間を探し出す人でした。

戦争を知る人はわずかとなくなりました。望月さんも一昨年亡くなりましたが、望月さんのご遺志を引き継ぎ、無念に散った兵士たちの願いをかなえる手伝いをしたいと思ひ活動しています。

また、戦争体験者が語る戦争を「口述記録」として残し、体験者の思い、戦争の姿を後世に伝えていきます。戦争体験者の口述記録は戦争の歴史を語る平和・友好の第一歩です。

常に思うのです「戦争は二度としてはいけない」。世界の平和を願っています。

平和だから伝えたい戦争

7月27日(火)から歴史民俗資料館に「戦争とくらし」コーナーを常設

戦争の歴史的経過、戦争と人々の暮らし、戦争と子どもたちをテーマとした実物資料などを展示するほか、企画展示、子ども向けの戦争関連の書籍コーナーを配置します。
開館時間／4月～10月：9時～17時
11月～3月：9時～16時30分

休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日
問い合わせ／市立博物館 ☎(21) 3380

2010 平和のための富士戦争展

今回紹介したシベリア抑留・遺骨収集の展示のほか、実物資料や遺品などを通して、平和の大切さ、命のとうとさを訴えます。

とき／8月10日(火)～15日(日)
ところ／ロゼシアター展示室

問い合わせ／核兵器廃絶平和富士市民の会
または平和のための富士戦争展実行委員会
(富士市職員組合内) ☎(55) 2893

ミニミニ原爆展

ミニミニ原爆展

被爆した広島・長崎の様子を写真ポスターで紹介いたします。

とき／8月9日(月)～25日(水)

閉庁日を除く

ところ／市役所2階市民ホール
問い合わせ／広報広聴課 ☎(55) 2700

通貨・証券などを返還しています

外地から引き揚げてきた皆さんが、税関などに預けた通貨や証券を返還しています。

問い合わせ／清水税関支署田子の浦出張所 ☎(33) 2791

視聴覚資料を貸し出しています

「火の海・大阪」100ばんめのサル

(ともにDVD：共和教育映画社)が新しく加わりました。

問い合わせ／広報広聴課 ☎(55) 2700

帰る場所がある

待っている人がいる

「ただいま」

それは「平和の言葉」

なのかもしれませぬ